

中国における西洋解剖学の受容について

—解剖学用語の変遷から

松本秀士

提 要

从明末到民国时期的西学东渐，带来了与中国传统医学并不完全一致的某些西方医学解剖学的概念。在被译成汉语的西医解剖学名词中，特别重要的有“神经”“动脉”“静脉”“淋巴结”以及“胰腺”等。本文通过对这些西方医学解剖学名词翻译历史的分析，探讨其中的医学思想上的核心问题。

0. はじめに

中国を中心とする漢字文化圏における西洋医学の受容を論じる上で、その解剖学用語に対する訳語の初出・成立は一つの重要な要素である。中国を中心とする漢字文化圏では、その独特の身体観による伝統医学の影響を深く受けてきた背景があり、特に西洋の身体観を直接的に反映した解剖学用語に対してつけられた訳語が、どのような医学的思考に基づいたものであるかを十分に考慮する必要がある、そのことで、その根底にある意義も明らかにされなければならない。

近代日中においては、例えば、神経系・血管系という西洋医学独自の概念が入ってきており、それら東西医学の初期的接触において最も核心的概念をめぐる訳語の成立とその変遷、あるいはその背景となった医学思想的諸相に関しては、およそ辛亥革命の起きた1911年以前に限定した上で、すでに拙稿「神経の概念の初期的流入に関する日中比較研究」(2008)、「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」(2008)等で論じてきた。

清末から民国期においては、医療宣教師ホブソン以来の中国語による西洋医学書編纂活動の流れを汲む博医会(China Medical Missionary Association, 創立1886年)が、中国語による医学用語の統一を意図した積極的な活動を展開し、英漢医学用語辞典である『医学辞彙』(初版1908)、あるいは、各種医学書を刊行してきた。当時の博医会は西洋人医師を中心とした組織で、西洋の医学概念を厳密に反映させる意図で、中国語による医学用語を創出していった。

そうしたことを踏まえながら、本稿では中国を中心に民国期までを対象として、神経・血管の訳語について再検討するとともに、同じく西洋解剖学独自の概念である腺・腺臓の概念の初期的流入に関しても、その核心にある医学思想的意義を十分に考慮しながら考察したい。それらの考察に際しては、日本における訳語の成立についても比較資料として検討したい。

1. 「神経」について

日本における「神経」の語の初出は杉田玄白による『解体新書』(1774)で、それは周知の通り、同じく玄白による『蘭学事始』(1815)に述べられているように、中国伝統医学の語彙である「神気」と「経脈」からつくられたものである。「神経」の語の成立には『解体新書』の原書であるクルムス(Johann Adam Kulmus 1689~1745)による *Anatomische Tabellen* 第二版(1732)のディクテン(Gerardus Dichten 1696?~1770)訳オランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen* (1734)において、むしろ否定的に紹介されていた「靈液説」を、玄白は逆に肯定的に捉えていたという背景もあった。いずれにせよ、本来は人体解剖という極めて実証的手法を用いて特定された神経は、中国伝統医学独自の専らの概念上の語彙である「神気」と「経脈」との合成によって置換されたのである¹。

西洋解剖学による神経の本来の意義は、中国における訳語の変遷をたどることで読み取ることができる。中国においては早くは明末に来華の宣教師テレンツ(Johann Terrenz Schrech 1576~1630 中国名;鄧玉函)による『人身説概』(1623)、同じくロー(Giacomo Rho 1593~1638 中国名;羅雅谷)による『人身図説』(成書年不詳)が中国語によって編纂された解剖学書として知られ、それらには神経に関する記述がみられる。両書では神経の訳語としてそれぞれ順に「細筋」「筋」が用いられており、それは西洋解剖学が古くから、今日いう筋系(muscle system)の「腱」と区別しなかったことを背景としたものであった²。

そのことは時代を隔てて、清代に来華した英国人宣教師モリソン(Robert Morrison 1782~1834 中国名;馬礼遜)が編纂した一連の『華英字典』(1815~1823)においても同様に行われ、nerveを「筋」、tendonについても「筋」と説明している³。清代において西洋解剖学そのものが伝えられるのは、英国人医療宣教師ホブソン(Benjamin Hobson 1816~1873 中国名;合信)による『全体新論』(1851)の刊行を待たなければならない。そこで nerve には「脳筋筋」、「脳筋」、あるいは「筋」等のように、「筋」を基本とした訳語が与えられていた⁴。

その後、来華宣教師の間では、中国語による標準的な人体解剖学の専門書を編纂することが急務とされ、その任務は米国人医療宣教師オスグッド(Dauphin William Osgood 1845~1880 中国名;柯為良)の手に委ねられた。そして、当時英国で最も権威をもったグレイ(Henry Gray 1825?

～1861)の人体解剖学書 *Anatomy, descriptive and surgical* (初版は1858)をベースとして編纂された『全体闡微』(1881)が刊行された。そこではじめて nerve の訳語として「脳筋」が確定されたばかりではなく、ホブソンでは訳語が与えられなかったその他の各 nerve についても系統的に訳語が定められたのであった⁵。

その後、民国期直前になると、日本経由の西洋解剖学が中国に入ってくる。『新爾雅』(1903)は日本に留学経験のある中国人汪榮宝(1878～1933)、同じく葉瀾(生没年不詳)が、新語・術語の用語集として共編したものである⁶。その中には「釈生理」という名目で、和製漢語による解剖学用語についての簡単な記述があり、「神経」の語も記載されている。しかし、解剖図は掲載されておらず、具体的な神経の形態とともに「神経」の語を中国に提示したわけではない。それが、ホブソン以来の「脳筋」に相当することさえも説明されてはおらず、和製漢語である「神経」が何であるか明確には伝わらなかったものと思われる。

また、日本経由の西洋解剖学を伝える明確な意図のものではないが、王有忠(生没年不詳)による『簡明中西匯參医学』(1906)では全身の神経の概観を描いた解剖図「神経図」とともに「神経」の語が示されている⁷。それは、解剖図を専門の絵師に一任したために、結果的に日本の解剖学書が模写され、編纂者の意図しないかたちで、解剖図に併記される「神経」の語も模写されたことによる。本文では依然として医療宣教師による「脳気筋」「脳筋」の両語が用いられるのみで、解剖図中に記される「神経」の語そのものについて説明する記述は全くないために、「神経」の語が如何なるものであるかは、中国に充分伝わらなかったとみられる。

和製漢語である「神経」が日本経由の西洋解剖学伝播の明確な意図の下に伝えられるのは、丁福保(1874～1952)が編纂した『新内経』(1908)の刊行を待たなければならない⁸。それは、中国伝統医学の経典『内経』に記載される解剖学的内容が部分的に織り込まれたものではあるが、西洋の人体解剖学が極めて体系的に伝えられている。そして、そこで用いられているのは、和製漢語による解剖学用語である。「神経」に関しては、第十七章神経系解剖篇、および第十八章神経系生理衛生篇において、解剖図を示しながら詳細かつ系統的に説明されている。

また、掃葉山房から出版された『生理解剖図説』(1908)も日本経由の西洋解剖学を、概説的ではあるが解剖図を示しながら伝えている。そこでも「神経」をはじめとする和製漢語が解剖学用語として用いられている⁹。

西洋では一七世紀から一九世紀末にかけて数多くの解剖学書が出版され、特に一八世紀以降のものは各国の近代語で書かれ、また著者の認識の違いにより、人体の各部位に対する呼称もまちまちであった。国際的な解剖学用語の統一は、先ず、ドイツ解剖学協会が1887年に委員会

を設立したことから本格的にはじまり、1894年にはじめてBNAとして承認されるに至った¹⁰。

当時の中国において最も組織だった医療活動を行っていた博医会では、そうした国際的な動きを受けて、英国人医療宣教師コースラン (Philip Brunelleschi Cousland 1861~1930 中国名; 高似蘭) を中心にして、解剖学用語を含めた医学用語の中国語訳をより適したものに改めながら統一する意図で『医学辞彙 (初版)』(1908) が編纂された¹¹。つまり、『医学辞彙 (初版)』は結果的に清末における西洋医学の用語辞書としての集大成的存在となったのである。そして、ここではじめて nerve と筋系 (muscle system) の腱等を表す「筋」との区別の必然性が反映され、nerve の訳語として「系」が定められた。

従って、博医会では和製漢語による解剖学用語を、即時に受容するようなことはしなかったのである。そして、和製漢語による解剖学用語を慎重に検討しながら『医学辞彙』の版を重ねていった。『医学辞彙』の初版 (1908) で nerve に対して定められた「系」の訳語は、同じくコースラン編纂による『医学辞彙第三版』(1918) においても異同はないが、続いて、やはりコースラン編纂による『医学辞彙増訂第三版』(1920) においては、「系」による訳語体系こそ変更するに至っていないが、新たに「脳経」の訳語も加えている¹²。それは、和製漢語である「神経」の語をやや考慮したものにもみえる。しかし、医療宣教師の流れでは、早くは先のホブソンが『全体新論』(1851) において、「心経」「肝経」等、一つの臓器とその臓器がもつ生理的体系を一つのシステムの概念で捉えて一経を接尾語とした呼称をしている¹³。『医学辞彙増訂第三版』における「脳経」の一経もそれと同様の意味合いとして、あるいは「経」の語が有する「縦糸」の意を、身体を縦断するように伸びる nerve の形態に重ねてつくられた訳語と考えるのが、和製漢語である「神経」の受容を拒んだ事実をみる限りは適切である。『医学辞彙』では和製漢語による解剖学用語についても参照した旨が述べられており、従って、和製漢語である「神経」を解剖学用語とすることは、少なくとも博医会を組織した西洋人医師の目からみれば非合理この上ないものであったことは確かなことである。つまり、中国伝統医学のいう「神気」や「経脈」の概念によって解釈されてつくられた「神経」の語は、西洋解剖学の視点では導入しがたい異質のものであったのだ。

その後も、当時の日本の金沢医科専門学校 (現金沢大学医学部の前身) に留学経験のある湯爾和 (1878~1940) が、「神経」をはじめとする和製漢語による解剖学用語を用いて『解剖学提綱』(1924) を編纂している¹⁴。コースラン、ならびに魯德馨 (1891~1974) の合編による『医学辞彙第六版』(1930) ではそれを受けてついに和製漢語である「神経」を nerve の訳語の標準として採用し、nerve の各語彙についても「一神経」と、「神経」を語幹とする和製漢語による訳語に改めている¹⁵。しかし、『医学辞彙第六版』(1930) も含めて『医学辞彙第十一版』(1953)

に至るまで、nerveの訳語として独自に創出した「脳経」は、和製漢語「神経」に添えて掲載し続けている¹⁶。また、先の『全体闡微』（1881）の流れを汲んで、 그레이の人体解剖学書を基にして編訳された『格氏系統解剖学』も博医会からの刊行であるが、初版（1923）では「脳経」をnerveの訳語の標準としていて、和製漢語の「神経」を採用するのは再版（1932）においてである。そのように、和製漢語による「神経」は、中国においては抵抗を伴いながらの受容であったのだ。

2. 動脈・静脈について

日本においてはじめて西洋解剖学独自の血管系の概念を伝えたのも、やはり『解体新書』（1774）であるが、『解体新書』において今日の動脈・静脈の語に当たるのはそれぞれ順に「動脈」「血脈」である。周知の通り、今日用いられる「動脈」「静脈」の語の初出は、その後刊行された宇田川玄真（1769～1835）による『医範提綱』（1805）とされる。しかし、『医範提綱』では「動血脈」「静血脈」の訳語も用いられており、大槻玄沢（1757～1827）による『重訂解体新書』（1798年作、1826年刊行）においても「動血脈」「静血脈」の訳語が与えられていることには注意を要する。いずれにせよ、『重訂解体新書』『医範提綱』の両書ともに中国伝統医学独特の「経脈」とその背景にある陰陽説上の動-静の考え方を基にして、西洋解剖学独自の血管系の概念を捉えながら、それらの訳語にたどりついたことは確かなことである¹⁷。

一方、中国においては、早くは先の明末の宣教師が西洋独自の血管系の概念を伝えている。先述の『人身説概』（1623）において今日の動脈・静脈にあたる訳語はそれぞれ順に「脈」「絡」、『人身図説』においてはそれぞれ順に「脈絡」「血絡」である。そこで重要なことは、「脈」の語そのものが備えもつ拍動の意や、逆に「絡」の語自体には拍動するものとしての意が備わらないことが、それら明末の医書においては的確に捉えられていることである。そのことは、先の日本の三書では考慮されるに至らなかったことである。

時代を下って、『全体新論』（1851）では今日の動脈・静脈に当たる訳語はそれぞれ順に「血脈管」「廻血管」、人体解剖学の専門書『全体闡微』（1881）においては、それぞれ順に「脈管」「廻管」であり、先の明末の宣教師と同様、「脈」の語が有する拍動の意が充分考慮されている。そればかりでなく、血管系が心臓を中心に血液を循環するものであることが、「廻」の語に盛り込まれている。つまり、静脈が静脈血を心臓に戻す役割を果たすものであるという意義が、「廻」の語によって表現されているのである。

『医学辞彙（初版）』（1908）において、今日の動脈・静脈に対する訳語はそれぞれ順に「脈管」「盂管」であり、さらにそうした血管系の背景にある西洋解剖学の意図は、中国語に備わる

性質を考慮した上で強く盛り込まれようとしている。両者の語とも血管を流れる血液の状態と広義の血管を意味する「脈」からなる。『康熙字典』(1716)¹⁸によれば「脈」は「脈」の異字体で、やはりそれ自体に「拍動」の意味が備わるが、偏が血につくる字体をあえて選んだことから、そこを流れる血液を主体にしたものであることが伺える。一方、「盪」は『康熙字典』によると血が心に上ることを意味しており、つまり、それを循環して心臓に戻る血液と捉えて用いたことがわかる。しかし、「盪」は『康熙字典』に収録されてはいたものの一般的ではなかったこと、脈については、本来は血管ではなく胃を表すものであり、それらの普及には抵抗があったとみられ、早くも『医学辞彙増訂第三版』(1920)には和製漢語である「動脈」「静脈」の語が、部分的に用いられはじめている。そして『医学辞彙』と同じ博医会から刊行された『格氏系統解剖学』の初版(1923)においても、和製漢語の「動脈」「静脈」が解剖学用語として用いられている。

次に、和製漢語「動脈」「静脈」の両語の中国への伝播状況を整理すると、解剖図を伴うものではないが、最も早くに中国に伝えたのは『新爾雅』(1903)とみられる。解剖図とともに両語を示したのは『簡明中西匯参医学』(1906)が最も早いとみられるが、先の「神経」と同様に、それは編纂者の意図によるものではないために、「動脈」「静脈」の両語そのものに関する説明は一切みられず、本文においては専ら医療宣教師による「血脈管」「廻血管」の両語が用いられている。中国で最も早くに、西洋の解剖図を提示しながら「動脈」「静脈」の両語に関して記述をしたのは『新内経』(1908)、ないしは『生理解剖図説』(1908)であるとみられる。従って、中国における和製漢語「動脈」「静脈」の両語の受容は、「神経」と比較してもかなり早くに起こったことがわかる。

3. リンパ節・リンパ管を背景とした「腺」について

日本における「腺」の語の成立については「個人文字から位相文字へ・位相文字から一般的な国字へ」の視点で、すでに笹原氏(2007)が先行研究を含めて論じるとともに、また、医学専門書の枠をこえて、一般向けの新聞や辞書での出現状況も対象にして分析しており、一般語彙としての普及度を知るための資料を提示している¹⁹。また、『解体新書』よりも後の書誌において一時的につくられた腺の訳語を位相文字と位置づけて網羅したことでは、非常に価値の高い論考といえる。しかし、腺には医学的な分類・変遷があるにも係わらず、それが全く考慮されていない。

リンパ節は今日の解剖学では、内分泌・外分泌を行う器官、すなわち分泌腺ではないことが明らかにされており、分泌腺の分類からは除外されている。一方、『解体新書』(1774)の原書

Anatomische Tabellen 第二版（1732）が出版される以前から一八世紀末頃までは、リンパ節は何かの分泌を行う器官と考えられており、唾液腺や涙腺等の外分泌腺も併せて腺に分類されていた（以下、このリンパ節をリンパ腺とする古い認識を「広義の腺」と呼ぶ）。『解体新書』においてもその背景下で、オランダ語の Klieren（ラテン語原語 Glandulae）を音訳した「機里爾（以下、キリイルと表記する）」を、広義の腺の訳語として用いたのである²⁰。

本稿では、そうした医学史的背景から、古い認識における広義の腺としてのリンパ腺に対する訳語の変遷を焦点としながら論じたい。また、リンパ腺とのつながりで論じられてきたリンパ管、およびそれを流れるリンパ液に対する訳語に関しても付随して論じたい。

今日用いられる「腺」の漢字は、すでに知られるように『医範提綱』（1805）²¹で新たに作られたものであるが、「腺」の漢字が作られた医学思想的意義については、これまで十分に論じられていない。同書において「腺」は、「水脈ハ細薄軟脆ノ膜管ニシテ皆腺ヨリ起ル」「水液ハ血中ノ清稀ナル液ニシテ腺ニ於テ泌別シ水脈ニ流通シテ…」とあるように、「水脈（今日いうリンパ管）」、およびそれを流れる「水液（今日いうリンパ液）」を生み出す起点として捉えられている。さらに続けて「此液ニ靈液混和スルニ由テ能ク諸部ヲ榮養ス」とあるように、身体全体を榮養する起点と捉えられている。「靈液」とは神経を満たす液であり、それは神経系が「靈液」の流動によって作動するという当時の西洋医学の「靈液説」に基づく考えであり、『医範提綱』では「水液」が「靈液」とともに生命の根源的要素であると捉えられていることを示すものである。フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』（2006）によれば、それらの記述の出典は主にブランカールト『新訂解剖学』であり、腺に関しては加えてフェルハイエン『人体解剖学』も参照している²²。

また、『江戸時代における機械論的身体観の受容』では、神経に関しては明らかに『内経』医学の影響がみられるが、その他についてはその影響はみられないとしている²³。しかし、ここで『内経』医学の經典の一つ『靈枢』にある經水第十二の篇をみると、「凡此五藏六府，十二經水者，外有源泉，而内有所稟，此皆内外相貫，如環無端，人經亦然」とあるように²⁴、人体の深層部にある「五臟六腑」とそれを遍く結ぶ「十二經脈」が、自然界を流れる「十二經水」、すなわち十二の江河と通ずるものであるという比喩的表現を用いながら、人の生命現象は自然界に相通ずるものであるとしている。つまり、それは『内経』医学を根底で支える「天人合一」の思想を端的に示したものであると同時に、生命現象の根源について、体内をめぐる「水」の源泉を一つの命題としていることを示したものであるのだ。従って、『医範提綱』において「腺」の造語に至った背景には、神経に対する解釈と同様にして『内経』医学の思想があり、つまり、体内をめぐる「水液」の源泉、すなわち生命現象の根源的存在として「腺」を捉えたのであり、

そう捉えたからこそ、「腺」から生じる「水液」が注ぐリンパ管に対して「水脈」の訳語を与え、「腺」という肉月に泉と書く漢字を新たに創造するに至ったのである。そのように、『医範提綱』では当時の西洋解剖学による人間機械論が、大きくは『内経』医学の核心にある身体観の実証に向けられていたのである。

「水脈」の訳語そのものは『重訂解体新書』（1798年作、1826年刊行）にもみられるが²⁵、『医範提綱』（1805）では『重訂解体新書』を参照した旨は記されておらず（『解体新書』を参照した旨は記されている）、『医範提綱』では独自に「水脈」の訳語に至ったとみられる。念のために『重訂解体新書』をみると、「水脈」の訳語は直訳であるという。リンパ管の「リンパ」の原語 *lympha*（ラテン語）の原義には、特に澄んだ川水・泉水の意味があり²⁶、オランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen*（1734）で示されるリンパ管に対するオランダ語訳はそれを全くの表面上の意味で直訳した *water-vaten* である。『重訂解体新書』で広義の腺には「濾胞」の訳語が与えられており、「一種小泡子」とあるようにその形態と、血液中の赤い成分を濾しとって透明な液体（すなわち今日いうリンパ液）にする器官であるという当時の西洋解剖学の視点においてつくられた語であって、腺とリンパ管との関係性を特別に重視して訳されたものではないことがわかる。つまり、少なくとも「水脈」の訳語を創出するに至った医学思想的意義は、『医範提綱』と『重訂解体新書』とは全く異なるのだ。

さらに『解体新書』を振り返ると、腺に対して与えた訳語「キリイル」について「在神経與脈絡相交之間也。以之分利血中之水而轉輸送管（自注；送管者。受水液之諸管云）」とあるように、血液中の「水液」のみを「送管」すなわち導管等に分け出す器官という認識で「キリイル」を捉えるのみで、神経と「脈絡」すなわち毛細血管等とが相交わるところの間に「キリイル」が存在すると説明してはいるものの、他にリンパ管との関係性を特に重視する注釈等はみられない。

また、『解体新書』においてリンパ管には「液道」の訳語が与えられている。「液」は中国伝統医学において、広く体液を意味する語である。しかし、「液道」を構成する「一道」は非常に概念的な語であるから、「液道」は解剖学的に管状の実体をもつリンパ管のリアリティに根ざした訳語とはいえない。つまり、そのことは杉田玄白が『解体新書』の編訳にあたり臨んだ「観臓」において、リンパ管については十分な認識をとまなうに至らなかったことを意味するものである。それは先の「神経」についても同様にしていえることである。さらには、専らオランダ語音による音訳である「キリイル」が腺の訳語として与えられたことも、同様の問題を抱えているのである。

すでに拙稿「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」（2008）において、『医

『医範提綱』で論じられる動脈・静脈に関して詳細な考察を行い、それが如何に『内経』医学の考え方に基づいて捉えられたものであるかを論じた。そのことを踏まえた上で、『医範提綱』に「腺ハ血ヲ動脈ニ受ケ其中ノ諸液ヲ分泌スルノ器ナリ」「水脈ハ多ク静脈ニ連ルヲ以テ水液ヲ其血ニ和シテ粘稠ヲ稀薄ニシ」とある記述をみると、「水脈」と動脈・静脈との関係を注視しており、「水脈」に関しても同様に『内経』医学の影響下で捉えられたといわざるを得ない。つまり、『医範提綱』における「水脈」と、その起点と捉えられた「腺」は、『内経』医学が「気」の流れる流体としてその独特の身体論を展開したことの延長線上で捉えられたものであるのだ。

以上のように、『医範提綱』が「水脈」を流れる「水液」の起点として「腺」を捉えているばかりでなく、さらにはその「水液」が「靈液」と合流することによって全身の中樞である神経系とのつながりをもつ一器官として「腺」を捉えているように、それらの関係を特別に重視していたことがわかる。だからこそ、「水脈」を流れる「水液」のいわば泉として「腺」を捉え、新たに「腺」の漢字を造語するに至ったのである。そして、その最も根幹には『内経』医学的解釈が存在するのである。

また、『医範提綱』成書（1805）の前には、吉益東洞（1702～1773）の長男南涯（1750～1813）が『気血水葉微』（1792）等を著し、今日の日本の漢方医学において重要視される「気血水」の考え方の基本、すなわち「気血水説」を打ち立てている²⁷。そうした背景から、『医範提綱』では「気」は「神経」、「血」は「動脈」「静脈」、「水」は「水脈」というように「気血水説」を解剖学的に捉えようとする意図がはたらいとも考えられよう。もちろん、南涯の捉えた「水」は『内経』でいう「津」および「液」の両者を併せた概念に当たり、「気血水説」を生み出した最も根底には『内経』医学がある。

日本における今日の「リンパ（淋巴）」の語の直接的な出典は、小川鼎三『医学用語の起り』（1983）の指摘通り、田口和美（1839～1904）による『解剖攬要』（1877～1882）で、「淋巴管」とある。それにつながるものとして、大野九十九の『解体学語箋』（1871）の「淋発」（今日いうリンパ液）、奥山虎章『医語類聚』（1872）の「列印巴腺」「列印巴管」「列印巴」があげられる²⁸。

一方、中国においては明末の『人身説概』（1623）に、ごく簡単ではあるが腺に関する記述がある。そこでは、ラテン語 Adenos を音訳した「亜特諾斯」が訳語として用いられている。Adenos には腺の意味がある他、原義に「ドングリ」の意味もあり、それは今日いう腺の解剖学用語としてのラテン語 glandula に通じるものでもある²⁹。『人身説概』の伝える西洋解剖学では、リンパ腺とつながるリンパ管については非常に曖昧であり、「白脈」「白絡」「白細筋」と三つの訳語を用いて表現している。つまり、リンパ管には動脈・静脈・神経につながる三種があるといっ

た認識を伝えるのみである。機能としてはそれらが臓器を守り「滲斂湿潤諸液」、すなわち、諸体液を分泌することをあげている。つまり、「白脈」「白絡」「白細筋」のように白-の接頭語を冠するのは、それを流れる諸体液が血液とは異なって赤色ではなく無色、あるいは乳糜が白濁していることによる。

先述のように『人身説概』にみる訳語「細筋」は今日いう神経を指し、「脈絡」は今日いう動脈を指す。後者の「脈絡」は、「脈」の漢字が備える拍動の意を適切に捉えたものである。その当時の西洋では、まだ神経が「靈液」を全身にめぐらす「靈液説」によって理解されており、リンパ管そのものや、その循環経路についても詳細は不明確であった。そうした背景から、今日いうリンパ管に対して「白脈」「白絡」「白細筋」の三つの訳語が与えられたのである。つまり、リンパ管が拍動するか否か、あるいは、「靈液」の経路として神経系と深く係わるものであるか否かが、はっきりしていなかったために、三つの訳語がつけられたのである。いずれにせよ、『人身説概』においては、全身をはりめぐらし、何か液状のものを通わす作用をもつものを「脈」「絡」「細筋」と訳すことが適切と考えられていたことがわかる。

時代を下って、清末の来華医療宣教師による「リンパ腺」、「リンパ管」および「リンパ液」に対する訳語を、最も主要な書誌に限定してそれぞれ順に以下に列記する。なお、複数の訳語が示されている場合には“・”で区切って、一つの括弧内に表記した。

『全体新論』(1851)	「小核・液核」	「吸管・吸液管・精液管」	「精液」
『全体闡微』(1881)	「吸核」	「吸管」	「明汁」
『全体通考』(1886)	「津液核」	「津液管」	「津液」
『省身指掌』(1891)	「吸核」	「吸管」	「明汁」
『医学辞彙(初版)』(1908)	「 棚 ・ 達棚 ・腺」	「 達脂 」	「 達 」

『全体新論』においてリンパ腺は「小核」、あるいは「液核」の訳語が与えられている。『康熙字典』において「核」は桃李等の果実の種を指し、あるいは、モリソンによる『華英字典』において「核」は the kernel of nuts と説明されるように、およそ、ラテン語 glandula にある「ドングリ」の原義に連なるものとして用いられた訳語であると思われる。リンパ管は「吸管」「吸液管」、あるいは「精液管」の訳語が与えられている。それはリンパ管の多くが小腸・大腸から伸びており、そこから栄養分を吸い上げる役割を担っていることを重視したものである。リンパ液については食物の消化物由来という視点で「精液」の訳語が与えられており、それは『内経』において食物の消化物に相当するものを「精微」と呼称していることを背景としたもので

あると考えられる³⁰。

『全体闡微』ではリンパ腺・リンパ管に対して、それぞれ順に「吸核」「吸管」の訳語が与えられている。「吸管」は『全体新論』を引き継いだものであるが、「吸核」としたことで「吸管」から「吸核」へリンパ液が向かうニュアンスが加えられたこととなる。リンパ液に対しては「明汁」の訳語が与えられており、それはその原語 lymph に特に澄んだ川水・泉水の意味があるため、「澄んだ」を「明」で表現している。

米国人医療宣教師ポーター（Henry Dwight Porter 1845～1916 中国名；博恒理）が編纂した解剖生理学書『省身指掌』（1891）は、1897年には再版本も刊行されており、清末に広く読まれた医学書として重要である³¹。訳語は基本的に『全体闡微』で定められたものを受け継いでいる。

英国人医療宣教師ダッジョン（John Dudgeon 1837～1901 中国名；徳貞）が編訳した『全体通考』（1886）は³²、先の『全体闡微』と同様に当時の英国において最も権威のあったグレイの人体解剖学書を基にしている。そして京師同文館より刊行された人体解剖学の専門書ということで重要である。この書では、リンパ管が幅広く体液を全身にめぐらすものであるという認識が反映されており、「津液管」の訳語が与えられている（なお、別称として「吸管」が紹介されている）。「津液」はリンパ液に対して与えられた訳語であり、リンパ管に付随しリンパ液を分泌する器官、すなわち、リンパ腺としての認識で「津液核」の訳語が定められている。そして、それは広義の腺の訳語としても用いられている。「津」「液」は中国伝統医学の語彙で、『内経』に遡ることができる。それは食物の消化物を由来とし、広く身体内を潤すものとして論じられている³³。そうした中国伝統の「津」「液」の概念が、西洋解剖学のいうリンパ液の概念と重なるという判断から、「津液」の訳語はつくられたといえる。

『医学辞彙（初版）』では、リンパ管に対して「**濾腺**」の訳語が与えられている。「**濾**」はリンパ液を表す目的で同書で新たにつくられた漢字であるが、『全体通考』と同様に『内経』医学の「津」の概念を反映させたものに他ならない。『医学辞彙（初版）』において**腺**は、先述通りに血管系の「管」として独自の定義が与えられた漢字で、竹冠から肉月に代えることで、人体内をめぐる循環器系を表現するのにより適した訳語を定めようとした意図によるものである。

「**楣**」は『康熙字典』によると「核」の旧字体であるという。つまり、『医学辞彙（初版）』ではあえて肉月を有する旧字体を訳語とすることで、人体内の一器官をよりの確に表現しようとしたのである。また、『医学辞彙（初版）』では「**楣**」は導管を伴わないもの（ductless）、「腺」は導管を伴うもの（with duct）というように、gland に対する二つの解剖学的分類を反映させて定められた中国語訳である。『医学辞彙（初版）』には和製漢語による医学用語を参照した旨が述べられており、従って、中国において本格的な医学用語として、和製漢語である「腺」が受

容されたのは比較的早い時点となる。しかしながら、『医学辞彙（初版）』では「腺」の読みを官話による「泉」の発音（現代中国語のピンインで quan）と定めており、日本における「セン」に従うなら官話による「線」の発音（現代中国語のピンインで xian）とすべきところをあえて区別を図った、あるいは、その原義から「泉」の発音をとったとみられる。それは、導管の有無による分類を設定した点で、和製漢語の「腺」との違いを明確化したものであると考えられる（しかし、現代中国語で腺は逆に xian の発音で、日本の「セン」に従ったかたちである）。

しかし、そうした西洋人医師独自の解剖学的に厳密な視点は、『医学辞彙増訂第三版』（1920）では早くも、導管の有無に係わらず全ての gland に対して「腺」の訳語に改訂する旨の記述が加えられた他、「淋巴」（今日いうリンパ液の意）や、病名として「淋巴管瘤」の語が加えられている。そして、博医会による『格氏系統解剖学』の初版（1923）ではリンパ腺、リンパ管およびリンパ液の訳語をそれぞれ順に「淋巴腺」「淋巴管」「淋巴」としている。なお、『医学辞彙（初版）』ではリンパ腺とともに「node, lymph **達棚**」と併記されており、この頃から中国にも新たなリンパ節の概念が入ってきている。

『新爾雅』（1903）では和製漢語の「淋巴管」「淋巴液」が紹介されており、また日本経由の西洋解剖学を伝えた『新内経』（1908）でも和製漢語の「淋巴管」「淋巴液」が、『生理解剖図説』（1908）では「淋巴管」が、『解剖学提綱』（1924）においては「淋巴腺」「淋巴管」「淋巴」が解剖学用語として用いられている（『簡明中西匯参医学』にはそれらの語彙はみられない）。博医会の流れにおいても『格氏系統解剖学』の初版（1923）以降では、そうした和製漢語の中国における伝播を反映させて、「淋巴腺」「淋巴管」「淋巴」が用いられている。従って、中国における「淋巴腺」「淋巴管」「淋巴」の和製漢語の受容も比較的早かったことがわかる。

4. 膵臓について

膵臓は無数の腺組織が集合し形成された一つの大きな臓器である。膵臓では消化液である膵液がつくられており、その膵液は膵管という大きな導管を介して十二指腸に外分泌される。同時に膵臓はインスリンというホルモンをつくり、内分泌している。つまり、膵臓は外分泌も内分泌も行う臓器である。

先述の通り『解体新書』では広義の腺として「キリイル」の訳語が用いられており、膵臓については、『解体新書』の原書オランダ語版で Klier-bedde（キリイル床）と呼ばれていたことから「大キリイル」の訳語が与えられていた。そして、今日の膵臓に直接つながる訳語は『医範提綱』で全く新たにつくられた「膵」の語に遡るものであることは周知の通りである。

中国では伝統医学の流れにおいて、明代に編纂された医書に「脂漫」を記した臓腑図がみら

れ、これは位置的に今日の膵臓を表したものと考えられる³⁴。また、清代に入ると王清任（1768～1831）の著した『医林改錯』（1830）に「総提」、ないしは「水道」として描かれた他、当時、その部位は一般に「胰子」と呼称されていたことが述べられている³⁵。それが果たしてどこまで近代的な解剖学の視点を備えていたか、疑問符が打たれる場合がある。

西洋解剖学の流れによる膵臓に関しては、『全体新論』（1851）がはじめて中国に伝えているが、その当時の西洋解剖学では主に膵臓の構造面が明らかにされていただけで、機能としてはそこから分泌液が分泌されることまでは知られていたが、それが具体的にどのような役割をもつのかについては解明されていなかった。そうした背景から『全体新論』では解剖図によって膵管や血管の通り方等についての概要は示されてはいるものの、この臓器に対して「甜肉」の訳語が与えられるのみであった。『全体新論』には「甜肉」の訳語の由来について、それが甘味をもったものであったところから名付けたとある他、そこから分泌される「甜肉汁」（今日いう膵液）の作用についても未詳とある。つまり、そうした曖昧な背景から、「甜肉」という一器官を表現する解剖学用語としては全く適切さを欠く訳語となったことがわかる。後の人体解剖学の専門書『全体闡微』（1881）の刊行の頃に至っても、膵臓が分泌液を分泌する腺の集まりであるという構造面だけが知られるだけで、具体的機能の解明については大きな進展はなく、そのことを反映するようにして、『全体新論』で当てられた「甜肉」の語は膵臓の訳語として『全体闡微』、さらには後の解剖生理学書『省身指掌』（1891）へと引き継がれた。

一方、『全体通考』（1886）では、「胰」を膵臓の訳語としている。つまり、『全体通考』では先の『医林改錯』で説明された「胰子」をもとに、中国の流れを考慮して、それがほぼ膵臓に相当するという判断の下で「胰」を膵臓の訳語としたのである。

単なる部位名としてではなく、その機能に相応の訳語が登場するのは『医学辞彙（初版）』（1908）において「**胰腺**」と定められたのが最初のこととなる。「**胰**」は「胰」の異字体であり、中国伝統医学の流れから生まれた『医林改錯』による解剖学的記述と一線を画す意図で、あえて「胰」の字の使用を避けたものとみられる。しかし、異字体である「**胰**」よりも「胰」の字の方が一般的であったために、『医学辞彙増訂第三版』（1920）では改めて膵臓に「胰腺」の訳語が与えられている。

『新爾雅』（1903）では「胰」、『簡明中西匯参医学』（1906）では「甜肉」、『新内経』（1908）では「膵臓」、『生理解剖図説』（1908）でも「膵臓」が用いられている。しかし、『解剖学提綱』（1924）では主に和製漢語による解剖学用語を用いて編纂されてはいるが、膵臓については博医会の流れで生まれた「胰腺」を採用している。それはつまり、中国における「五臓六腑」の流れを重視して「肺」「心」「肝」「脾」「腎」の五つのみを「臓」に属するものとし、膵臓はあ

くまで腺の分類としたことを意味するものである。

5. 結び

西洋解剖学をはじめて中国にもたらした西洋人医療宣教師の流れを汲み、中国にける解剖学用語の統一に向けて顕著な活動を行ってきた博医会刊行による『医学辞彙』の各版を軸に、本稿で論じた和製漢語による解剖学用語の受容を以下にまとめたい。

「神経」に関しては、この語が中国に普及した後も「脳経」を *nerve* の訳語として併記し続けていたことからわかるように、形態学的なりアリティを重視する西洋解剖学の立場からは「神経」の語があまりにも中国伝統医学の概念で捉えられた不合理この上ないものと判断されていた。

それに対して、「動脈」「静脈」の和製漢語は「動-静」の対立する接頭語をつけた構造により、西洋解剖学の立場からも比較的受容しやすかったことが伺える。しかし、それは来華宣教師の流れでも注視されてきた「脈」の漢字に本来備わるはずの「拍動」の意を外すことで妥協したものでもあった。

「腺」については、初出の『医範提綱』の段階では、「神経」と同様にして『内経』医学を背景にした解釈が織り込まれていた。それは、分泌腺としてリンパ節を捉え、そこからリンパ液がリンパ管へと分泌されるという、当時の西洋解剖学による不十分な認識をもとにしたものでもあった。『医学辞彙』による「腺」の訳語の受容は、導管をもたない分泌腺に対する訳語として採用されたものであり、『医範提綱』での解釈のようにリンパ管との関係によるものではなく、西洋解剖学の腺に対する認識が、新たな段階へと進んだことを反映したものであり、日本的な西洋解剖学の解釈から一線を画す意図が織り込まれたものであった。

膵臓については、中国でいわれてきた「胰子」が位置的にそれに相当するとみなされた上で、中国伝統医学のいう五臓とは一線を画した全く別の「腺」の分類で捉えられ、「胰腺」の訳語に至った。つまり、中国において伝統医学のいう五臓の意義は重く、「肺」「心」「肝」「脾」「腎」以外にあり得ず、博医会の流れにおいても、中国伝統医学の独自性は十分に考慮されていたのである。

以上のように、西洋人医療宣教師が主体となって創出された解剖学用語の中国語訳の中には、和製漢語によるそれと比較して、より合理的なものが存在し、単なる過渡的な訳語ではなく、医学史的に重要な意義をもつものである。そのことは、和製漢語による解剖学用語の中に多くの『内経』医学的解釈があったことを示すものでもあり、また、そのギャップから『内経』医学の本質を伺い知ることができるのである。

【謝辞】本稿執筆に必要な史料収集に当たり、義弟潘其全より多大なる協力を得ることができた。ここに感謝の意を述べたい。

【注】

- 1 拙稿「神経の概念の初期的流入に関する日中比較研究」、沈国威編『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成』関西大学出版部 2008 参照。
- 2 本稿で『人身説概』は上海図書館蔵抄本、ならびに中国中医研究院図書館蔵抄本（両者本文に異同はほぼみられない）を、『人身図説』は中国中医研究院図書館蔵抄本参照。
- 3 本稿では『華英字典』は、*A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE IN THREE PARTS* ゆまに書房（早稲田大学附属図書館蔵本原書影印）1996 参照。
- 4 拙稿「ホブソン（合信）にみる解剖学的語彙について」『或問』11号、近代東西言語文化接触研究会 2006 参照。
- 5 詳細は拙稿「人体解剖学の専門書『全体闡微』の解剖学用語について」『或問』12号、近代東西言語文化接触研究会 2006、ならびに拙稿「清末刊行の中国人体解剖学書について」『日本医史学雑誌』第53巻第4号、日本医史学会 2007（同学会学術奨励賞受賞論文）参照。
- 6 本稿で『新爾雅』は、沈国威編著『『新爾雅』とその語彙 研究・索引・影印本付』白帝社 1995 参照。
- 7 本稿で『簡明中西匯参医学図説』は、王有忠『簡明中西匯参医学図説』広益書局 1906（南京中医薬大学図書館蔵）参照。
- 8 本稿で『新内経』は、丁福保編『新内経』三版、上海文明書局 1911（筆者蔵）参照。なお、丁福保『医学指南』上海文明書局、刊行年不詳（筆者蔵）には、丁福保による著作の序が集められており、そこに示される『新内経』初版本（1908）の序には各章名が列記されており、三版のそれとの異同はみられず「神経」の語もみえる。そのことから、本稿では三版と初版本に和製漢語の使用状況に異同はないものとして論じた。
- 9 本稿で『生理解剖図説』は、撰者不詳『生理解剖図説』掃葉山房 1908（潘其全蔵）参照。
- 10 坂井建雄『人体観の歴史』岩波書店 2008、304～305 頁参照。
- 11 本稿で『医学辞彙（初版）』は、Philip B. Cousland, *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms*, Medical Missionary Association of China Shanghai, 1908（『医学辞彙』、博医会）Harvard-Yenching Library 蔵参照。
- 12 本稿で、『医学辞彙第三版』、および『医学辞彙増訂第三版』は Philip B. Cousland, *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms*, Medical Missionary Association of China Shanghai, third edition 1918, *Appendix to third edition of the English-Chinese Lexicon of Medical Terms*, Medical Missionary Association of China Shanghai, 1920 合本（潘其全蔵）参照。
- 13 本稿で『全体新論』は、合信『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版 1851、上海図書館蔵参照。
- 14 本稿で『解剖学提綱』は、湯爾和『解剖学提綱』商務印書館 1924（潘其全蔵）参照。
- 15 本稿で『医学辞彙第六版』は高似蘭 魯德馨合編『医学辞彙』第六版、中国博医会 1930（潘其全蔵）参照。
- 16 本稿では、孟合理 魯德馨合編『高氏医学辞彙』第八版増訂、中華医学会編訳部 1937、孟合理 魯德馨合編『高氏医学辞彙』第九版、中華医学会出版 1939、孟合理 魯德馨合編『高氏医学辞彙』第十

版、中華医学会出版委員会 1949、魯德馨編訂『高氏医学辞彙』第十一版、中華医学会出版 1953（何れも潘其全蔵）の各版で検討した。

17 拙稿「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」『或問』14号、近代東西言語文化接触研究会 2008 参照。

18 本稿で『康熙字典』は、『康熙字典』上海書店、1985（康熙五十五年御製本影印）参照。

19 笹原宏之『国字の位相と展開』三省堂 2007 参照。

20 本稿でオランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen* ならびに『解体新書』は、小川鼎三監訳酒井恒編訳『ターヘル・アナトミアと解体新書』名古屋大学出版会、1986 参照。

21 本稿で『医範提綱』は、宇田川玄真『医範提綱』風雲堂 1805、九州大学附属図書館医学分館蔵参照。

22 フレデリック『江戸時代における機械論的身体観の受容』臨川書店 2006、280 頁参照。

23 前掲『江戸時代における機械論的身体観の受容』256～257 頁参照。

24 本稿で『靈枢』は、『靈枢經』（明趙府居敬堂刊本影印）『四部叢刊』上海商務印書館 1935 参照。

25 本稿で『重訂解体新書』は、杉田玄白新訳 大槻玄沢重訂『重訂解体新書』東都書肆 千鍾房 1826、京都大学附属図書館蔵参照。

26 大槻真一郎『科学用語語源辞典ラテン語篇』同学社 1997、327 頁参照。

27 富士川游著 小川鼎三校注『日本医学史綱要 1』平凡社 1974、168～169 頁参照。

28 小川鼎三『医学用語の起り』東京書籍 1983、52～54 頁参照。

29 前掲『科学用語語源辞典ラテン語篇』15 頁参照。

30 たとえば『靈枢』五味第五十六の篇に「穀始入于胃。其精微者。先出于胃」とある。

31 本稿で『省身指掌』は、博恒理『省身指掌』京都燈市口美華書院、1891（および 1897 年増訂版）、Harvard-Yenching Library 蔵参照。

32 徳貞『全体通考』同文館 1886（筆者蔵）参照。

33 たとえば『靈枢』平人絶穀第三十二の篇には「平人不食飲七日而死者。水穀精氣津液皆盡故也」とあるように絶食状態が続けば「津」「液」は尽きる旨の記述があり、同書決氣第三十の篇には「腠理發泄。汗出溱溱。是謂津…穀入氣滿。淖澤注于骨。骨屬屈伸洩澤。補益腦髓。皮膚潤澤。是謂液」とあるように汗としての「津」、および関節・脳髓・皮膚を補い潤すものとしての「液」に関する記述がある。

34 詳細は、高島文一「人体内景図の脂[月曼]・脂膜について」、山田慶兒・栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』思文閣出版、1997、489～502 頁参照。なお、漫の字は本来は肉月に曼、すなわち[月曼]である。本文ではこの字の本字である「漫」とした。

35 拙稿「近代解剖学への萌芽における日中比較身体論」『或問』9号、近代東西言語文化接触研究会 2005 参照。また、本稿で『医林改錯』は、王清任『医林改錯』京都隆福寺胡同三槐堂書舗 1830、中国中医研究院図書館蔵参照。

なお、明代の李時珍『本草綱目』（上海科学技術出版社金陵初刻版再印本 1993 参照）では「**脰**（自注；音夷。亦作胰）時珍曰。一名腎脂。生兩腎中間」とあるように、それが左右の腎臓の中間にあるとしており、『医林改錯』のいう「胰子」と明らかに異なっている。